

耳神様（みみじんさま）

人々が信仰で厄難除けをする習わしは今でも数多く残されています。苦しい時の神頼みや、薬をもすがる気持ちの祈りは、素朴な靈験談として静かに語りつがれています。

中岩瀬横和田（通称よかだ）地区に、お酒の好きな行者様を祀ったという石仏があり、人々は行人様と呼び大事にしていました。そして耳の病氣や咳のひどい人、ぜんそくの人などの信仰をあつめ近郷近在でも有名になりました。なかでも耳の病氣の人が多くお参りに来たので、いつしか耳神様と呼ばれるようになり、病難にたえる精神力と、きびしい生活にたえる根性は、心からにじみ出る信仰の強さとなって、崇敬されました。

古老間中治さん（中岩瀬）は、当時の靈験談を、今でもはっきりした記憶として話されました。耳だれで難儀した時耳神様に「どうか私の耳だれをなおして下さい。なおりましたらお酒を一だしんぜます。」と、真剣におすがりしました。

「日に日によくなって、お参りの足も軽くなりましたよ」「不思議にも利き目ができめんでしたね」と、話を弾ませ

ました。昔はどういうわけか耳だれの人が多かったと言われます。

榛の木を右手に祀られた耳神様は、人目につくようなものではありませんでしたが、密かにお参りに来る人たちのお供え物がたえません。榛の木には、行者様の好きだったお酒を、二つの竹の筒に入れて一つに結び（一だ）お礼参りに来た人々が釣り下げていくのです。丁度その様は榛の木にたくさんの竹の花が咲いたようでした。

今では区画整理され、跡かたもありませんが、横和田と南二丁目境の川沿いの、大きなしだれ柳の根方に、誰が用意したのか、プロッタ石を台にして、お酒をあげたと見える盃やお賽銭などがあげられています。

昔の耳神様を知る人は、格好の場所に、当時の耳神様を慕いお参りしているのかも知れません。

☆一だ一馬一頭に負わせた荷で二つのこと

